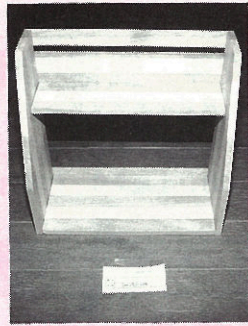
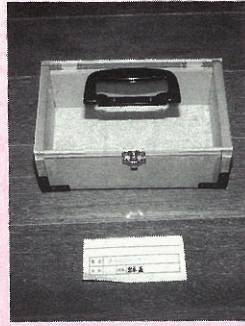


磯部大輔



森野寛二郎



宮本直



ふるさとへ

13

富田喜代子さん

(東京都在住)



夏祭り

「行つてかえります。」

毎朝、出掛ける時にはこう挨拶してよく友人たちに笑われた。高校を卒業して上京、洋裁学校の学生寮で三年間過ごした時のことだ。東京の人は「行つてきます」が普通だと言われたが、私にはどうもこの言葉がなじめなかった。私は古市の商家に生まれた。家には大勢の住込み店員がいて、朝早くから夜遅くまで人の出入りが絶えなかった。店員たちは朝になると、見本の商品を持って郡部に散つて行く。両親は商売で手が離せないで、姉や妹とは歳の中でかくれんぼをしたり、発送する商品の中を駆け回つて遊んだのを覚えている。父が丹精込めて育てたバラやボタンの花芽を全部摘み取り大目

玉を食つたこともあった。

夏の祇園祭りが来ると、商店街は一気に盛り上がった。大人たちは夜遅くまで夜店の制作に精を出す。大道具、小道具、人形が手際よく作られ、思い思いの出し物を店同士で競い合う。店の中がたちまち忠臣蔵の討ち入りや桃太郎の日本一の晴れ舞台の場面に変わっていった。

宵祭りの夜、各商店の出し物が一斉に幕を開ける。大人も子供もカラフルな照明に浮かぶ夜店を一軒一軒見て楽しんだ。本祭りは仮装行列でクライマックスを迎える。御輿や山車の踊りに続いて町内ごとに趣向を凝らした仮装行列が続く。

主人の転勤で札幌、仙台、名古屋と回つたが、その都度

日置俳壇

〈兼題 春雨〉

春雨に煙る一日の里静か
国司ハル子
留守番の居眠りさそう春雨の雨
秋枝タキ子
春雨や池の鯉みな口並べ
吉村一泉女
春雨や過疎の古里朽ち地蔵
高尾 凡果
春雨のけぶる彼の丘父母の墓
白石 敏江
春雨や園児傘持ち得意顔
塩瀬 米江
春雨や赤い灯青い灯街にとけ
河内みさほ

〈雑詠〉

春雨や銭湯帰りを待ち合わせ
西村亥子代
梅散るや腹掛赤き地蔵尊
池永 君江
職退きて天下晴れての
富田佳津美
大朝寝
閉されしまゝの茶室に梅薫る
吉村一泉女
友は皆白髪春の彼岸寺
古谷 桃月
冬晴や故郷に名山花尾富士
松岡ヨシ子
成人を祝う背広の責重し
福山スミエ
春愁や再会約す無人駅
白石 敏江
外燈に映えて古木の梅香る
池永 君江

と挨拶したい。

筆者紹介

昭和7年生まれ。古市出身。旧姓 中野(中野三店)。大津高卒業後、東京杉野ドレスメーカー女学院デザイナー科を経て服飾デザイナー。結婚・出産を機に主婦業に専念。

全国有名百貨店デザイナーコンクール第一位を受賞。家族は、夫、長男、長女。